

## 昭和史の見直しを迫る新資料

### 「貴司山治全日記」DVD版の刊行によせて

伊 藤 純

#### 一．まえおき

今年（二〇一一年）一月「貴司山治全日記」DVD版と、研究論文や人名索引をおさめた大冊「貴司山治研究」が刊行された。1)

この日記は、貴司が大阪時事新報懸賞小説に「紫の袍」という作品を応募し、選外佳作となったのを手がかりに大阪へ出て行く一年足らず前、大正八年（一九一九年）秋、十九歳の時点から始まっている。

当時、徳島県の鳴門は、大阪へ出るのにも一晩がかりの汽船の旅を必要とする僻遠の地だった。そのような田舎町で、文章を書くことの魔力に取り憑かれた十九歳の少年の、鬱勃とした想いが、日記にはその一頁目から溢れている。残された日記の第一日、大正八年十月八

日の記載は十九頁に及び、カオルという撫養（鳴門の四国側の市街地）花街の芸者との夜中の散歩の情景が書かれている。しかし、この散歩自体は話を展開するための舞台装置に過ぎない。鳴門にいた極めて変人の蘭学医のことを「龍舌蘭物語」という小説に書きたいということ、カオルはその蘭医の遠縁の女だということ、などが延々と綴られている。日々のことを記録するというよりは、これは一つの物語りである。

早くもここに、貴司の日記の特

徴が顕れている。貴司日記には、もちろん、日々の記録という面もあ

貴司山治全日記（徳島県立文学書道館収蔵）



るが、時には、将来、物語として展開できそうな構想のメモ、取材メモ、あるいは論文・評論的な論説、批判や悪態……さまざまな事柄が日記としての頁や枠組みを無視して書き連ねられる。

その最たるものは、昭和九年三月二十六日の記載であろう。2)

この日は、貴司が一定の転向を決意して一月からの拘禁から解放された日である。貴司は昭和三年、プロレタリア文学の戦線に加わり、非合法面にも接触せざるを得ないことを予期して、日記を一切書かないことを決める。その、自己に課した禁制を、「この日、解くのである。そして、運動に加わり、日記を書かなかった期間を総括するような勢いで、プロレタリア文学運動、それを指導すべき共産党への批判、他方で強化されるファシズムの言論弾圧下でのプロレタリア文学者としての生き残り方、転向の戦略、などを一気呵成に四万字近い文章として書き上げる。それが二十六日一日分である。

つまりは、貴司日記は、日記であると同時に、半ば「読者」を予想した「表現」「主張」……論争を挑む文書だともいえる。

## 二・貴司山治日記の注目点

貴司は、小説家というだけでなく、ジャーナリスト、編集者、プロデューサーという側面を強くもっている。プロレタリア文学運動での知友はもちろん多いが、むしろそれ以外のいろいろな世界の人々、労働運動家、留置場で会ったヤクザ、戦時末期に内蒙古を訪れた際に生まれた内蒙古・華北人脈、京都での開拓・農民運動の同志など、枚挙にいとまがない。

今回のDVD版では、貴司山治研究会のご尽力により、これら多方面の人々についての、二万五千件に及ぶ人名索引が作成されている。そして、DVD版という特性を生かして、人名索引から直ちにその人名の出現している日記の頁にジャンプすることができる。

閲読される方の関心に応じて、人名をキーとした同時代記録に容易にアクセスすることができるのである。

その読み方はさまざまな可能性を秘めているが、ここでは、私なり

の注目をいくつか挙げておきたいと思う。

### 三・塩田労働者の島「高島」

貴司が社会主義に関心を持ち、プロレタリア文学の道に入っていくきっかけとなったのは、生まれ里「高島」が塩田労働者の大集落であり、毎年のように起こる塩田争議の見聞に影響されたためだ、ということは貴司自身の自伝的な文章「私の文学史」<sup>3)</sup>にも書かれている。そこには

「……私の故郷（徳島県板野郡鳴門村高島・現鳴門市高島）は、塩田労働者の一杯いる所で、毎年のように塩田労働者のストライキが起こっていた。ストライキは毎年々末に必ず起るようになっていた。

……暮になると、村中がもうストライキというコトバをおぼえ、ストライキ騒ぎに巻き込まれて、ほかのことには手がつかなかった。私も同様であった。私は十九才か二十才だ。生来の人道主義的考え方で、私の家の裏にきて妾とねている旦那よりも、私の家に「荷い」（荷かつぎ棒）をかついで飯米を借りにくる労働者に勝たせたいと思った。」

とある。

実は、鳴門の塩田争議は明治時代からほとんど毎年起こっている。これは工場労働者の争議とはやや異なった背景がある。高島に住む数千人の塩田労働者は、毎年契約が更新される季節労働者なのである。大変な重労働と特殊技能を求められる入り浜労働の、一種の職人集団だった。その賃金条件は毎年更改されるので、その都度交渉が必要であり、この交渉が労働争議のような形に発展していった。さらに、明治四十五年、日本聖公会徳島インマヌエル教会宣教師J・マキーが来村して労働者の団結と労働組合の必要性を説いたと伝えられる。<sup>4)</sup>

このような状況の中で、大正十年にはこの鳴門地域の塩田労働組合の組織者として高島の青年福永豊功の名前が現れる。<sup>5)</sup>

貴司はこの福永と親友だった。昭和四十二年に鳴門の郷土史家岩村武勇氏にあてた手紙に、往事を追想して

「……二人とも空名ばかりの青年団がバカバカしくなり、二人だけの交際となったのです。三日に一度、やがては二日に一度、又は毎晩のように、互いに行ったりきたりしている間に、福永は十七歳で高島塩田労働組合長となり、私は村役場書記補一年……福永が長谷川如是閑の『我等』『批判』などを持ってきて私にみせ、私は賀川豊彦の影響で社会主義をおぼえ、河上博士の『社会問題研究』(月刊)をとっていたので、それをみせて「如是閑ぐらいではあかん」と福永をやっつけた(激励した)ものです。……」<sup>6)</sup>

とある。

この文面通りなら、貴司がまず社会主義に目覚め福永にそれを吹き込んだように聞こえるが、実際はどうだったか分からない。というのは、福永青年はわずか十七歳で高島塩田労組の組合長になり、二十歳頃には鳴門・撫養地域全体の連合会の執行委員長になるほどのカリスマ性、指導性をもった人物だったと考えられる。警察資料にも「福永豊功八鳴門高島ノ塩田労働者ナル力塩田労働者トシテ八相当頭脳アリ、早クヨリマルクシズムニ没頭シ……」<sup>7)</sup>などと書かれているのである。

そして、福永はこの時期、大阪に本部があった共産党系の労働組合全国組織「日本労働組合評議会」とも深い連携があったことが、貴司日記からも推測できる。(後述)

鳴門、なканずく福永のお膝元高島には、大正十四年夏評議会の書記長尾多喜雄がきて、「経済及び労働講座」を開いたとされている<sup>8)</sup>。さらに、評議会委員長野田律太、中央委員飯石豊市、オルグ太田博なども来村しており、この評議会の応援下に大正十五年、昭和二年、の二回にわたり例年にもまして激しい争議が行われる。

他方貴司は、実は、この争議の時期には、既に鳴門にはいなかった。大阪での新聞記者もやめ、職業作家たるべき第一歩を踏み出していたのである。

#### 四・若き指導者福永豊功

貴司日記によつて、貴司と争議との関わり、福永との関わりを検証していくと、その実態が見えてくる。

鳴門にいた頃の記事は、街をさまよひ共に酒を汲む、といったことばかりである。

ところが、大阪に出た貴司が一時帰省した大正十四年二月二十八日の日記に初めて福永の眞の姿の一端が現れてくる。

「福永氏来。全国労働組合の大会が神戸青年会館に開かれ、塩田労働組合聯合会代表として之に出席するため近々神戸に行くとの事なり。……」

と記載され、三月十六日には神戸から総同盟全国大会出席中というハガキをもらつたことが記されている。この三月十四日から十六日にかけて開かれた日本労働総同盟の大会で、共産党系の左派が分離し日本労働組合評議会が生まれる。福永は、このような時期に既に労働組合のナショナルセンターに顔を出す地位にあつたのである。

その福永が、翌年（大正十五年）一月に突然やつてきて借金を求める。翌月には、組合運動に入れあげすぎたためか細君に逃げられたという「痴情綿々」たる話を泊まり込みで聞かされたりしている。しかし福永は、妻に逃げられるという個人的苦境を乗り越えてその後、大正十五年と昭和二年という二度の鳴門塩田大争議を指導している。

その間、大阪にいる貴司の元への福永の来訪は頻繁であり、その理由が日記に明記されている。一応原稿で食べるようになりつつあつた貴司から、活動資金を援助してもらつたためなのである。

「今月は福永に百円以上だ。福永のやり方も一考を要する。一地方へ行ってその辺の有志に話し、大会を開く段取りをしてすぐ警察に弾圧を加えられ、手足が出なくなつたといつては逃げかへつてくるやうなことをくりかへして、その間の費用を友人からもらつてばかりあるやうでは何だか遊んであるやうなものだ。」（昭和二年一月三十一日の日記）

この「一地方へ行って……云々」というのは、おそらく、前年四月に評議会が指導した「十州塩田労働者組織の方針」という、鳴門の争

議を瀬戸内海沿岸の塩業地の労働者に拡大しようという方針に沿ったものと思われる。9)

しかし、このオルグ活動は特高につきまとわれ惨憺たる結果に終わったようである。昭和二年二月一日の日記には、豊中の貴司宅に

「……福永君がくる。汚い着物をきてゐて、尾行を免れてこまできたのだといふ。……夜の汽船で撫養まで送りかへされるのだといふ。」

と書かれている。

こうして福永は「十州塩田労働者」の連帯闘争という《机上の空論》から醒め、鳴門地域単独での闘争に想いを定めたものと思われる。同年四月五日の鳴門公会堂での労組聯合の大会を皮切りに七月末にいたる三ヶ月に及ぶ、鳴門塩田争議史上もっとも激しい争闘が行われるのである。

##### 五・評議会中央委員会を秘密アジトで傍聴

その直前、もう一つの興味有るエピソードが日記に記されている。既に生活の本拠を東京に移していた貴司が、たまたま豊中に戻っていた時（日記の記述に依れば、娘恵津と貴司の結婚を認めず絶縁状態だった恵津の父奇二治郎兵衛との和解の席が用意されたための上阪と思われる）昭和二年四月十八日、また福永が来て貴司は五十円を援助する。この日というのは、前日十七日から鳴門現地では怠業、すなわち実質的なストライキが始まったといふきわどい時期である。

五十円を福永に与えた貴司はそのまま彼と連れだって西野田（現大阪市福島区）の評議会本部に赴く。同日の日記にその詳細が記されている。

「……中央委員会をやつてゐるのを、委員長の野田君にあつて福永君の用件のため、秘密の場所をさがしさがし、ついてゆく。どこかわからない裏町の二階で、評議会の中央委員が皆集まつてゐる。自分たちをここへつれてきたのは書記の長尾多喜雄君である。階下でかなり長く待ち、休憩になったといつて、野田君が下りてくる。休憩の前に、二人の傍聴を許すかどうかを提

議し、反対者もいたが結局「異議なし」となったから、上がれ  
というので、自分も福永君について二階に上る。一時間位傍聴、  
杉浦君の雄弁、たまにしか口をきかない冷たい顔のやせた男が  
国領君とわかる。自分らを二階に上げるのを最も反対したのが  
多分この国領君だろうと思っただらそうではなくて、野田の提案  
を大半が「いかんいかん」「必要なし」というのを、国領君が  
たつた一と言「いゝじゃないか」といったとあとで判明。国領  
の発言が何かにつけて鶴の一声のような力のあることも、あと  
で長尾君、飯石君からきく。

……(会議の後・注)会場の近くのコーヒー店で長尾、飯石、  
福永と雑談。長尾が情熱をこめてしゃべる福本の理論を「何の  
ことかわからん、そんな議論は労働者にはむかん。」と飯石が  
やつつけると、長尾は「そういう飯石こそ反労働者のなんだ」  
とやつつける。「じゃ一体どうすればいゝのかなあ、ストライ  
キや、デモをみなうつちゃつとして理論闘争が一番大事だとい  
うのなら、これからの労働者は机の前やら、こうしてコーヒー  
店でばっかりしなければならなくなる。おれにはわからんし、  
つらいなあ。」

「君は敗残者だよ。」

「困ったなあ、お前のような頭のいゝのが、同志のよしみで、

そこを何とかしろよ。わしはお前のいふとおりにするから」

そのへんで話しはおしまいとなった。……」

日本共産党が独自の革命戦略であった「福本イズム」を捨て、モス  
クワ指示の「一九二七年テーゼ」に方向転換するのはテーゼが日本代  
表団に通告される七月以降のことである。つまりこの四月の頃は難解  
なレトリックに満ちあふれた福本イズムが“革命家”たちの心を酔わ  
せていた。東京帝大法学部出のオルグ長尾もその一人だったのだろう。  
その長尾と、“常民”である飯石や福永の乖離がユーモラスに描かれ  
ているように思える。

ところで、この中央委員会は、同年五月に大阪で開催された第三回  
大会を準備するためのものだったと考えられるが、具体的にどんな議  
論があったのかは記されていない。因みに、福永は五月の第三回大会  
で評議会中央委員に選ばれている。

## 六・闘争者福永と観察者貴司

このような経過の中で目に付くのは、労働運動、社会主義運動に対する貴司と福永のあまりにも異なる態度である。福永は、ほとんど本能的に、困難に直面しようが踏みつけられようが、ともかく塩田争議権力との闘いの主体者として行動しようとする。それに対して貴司は、熱烈な援助者である。セビられるままに金を渡し、時には渡してしまった後「あと六円ほどしかない。月末危し。」(昭和二年一月二十四日)などと書かれている場合もある。

しかし、決して、福永に和して闘いの主体者になることはない。

貴司の自叙伝「私の文学史」の一節に、故郷鳴門にいた二十歳前の頃から

「……私は、いつの頃から、文学の神にとりつかれた時から、どんな局面に立ち、何をしても、本質的に傍観者であり野次馬であるという態度を内心に持するようになつていたのである。」

……それは、誰にもいわぬ秘密であつたが……私は、それら万花鏡のさまさまを、悉く見てとり、記憶して、あとでそれを小説に描く、それが私の一生の仕事だ、という考え方、というよりは、一つの信念が私の中に生れてきていたのである。<sup>10)</sup>

と、書いている。それはジャーナリスト長谷川如是閑の「断而不行」(断じて行わず・物書きは事態の当事者になつて動いてしまつては、公正な正しいことは書けない。有言不実行の信念が必要だ)という考え方にも一脈通じる。

その後貴司は、プロレタリア文学運動に加わることによって、「断而不行」という立場を一步踏み越えたようにも見える。しかし、貴司日記や折々の作品、論文などを検討していくと、基本は変わっていないことがわかる。貴司は観察者であり立会人であり、そして受け手である読者大衆の側に寄り添う報告者、語り手であるうとする。

この本質は、例えば貴司の通俗性が批難の矢面に挙げられた「芸術大衆化論争」でも、またプロレタリア文学の崩壊期に作家同盟の解散を主張し分散抵抗を主張したことにも、組織的運動が解体した後の時



代に『文学案内』という雑誌をだしたことに、また、ファシズム下でいかに作家活動を維持できるかを考えた独特の「転向」の苦闘にも、一貫して内在しているように思う。具体的なその様相は、「全日記」のさらなる解析によって明らかにされていくことが望まれる。

## 七・阪神間モダニズムの

### 同時代資料『婦人之世紀』

大正九年から大正十五年の間、貴司は学芸記者として大阪時事新報に勤務しており、この時期に大阪割烹学校の校長的場多三郎や講師江原鈞と知り合い割烹学校の機関誌『婦人之世紀』編集に関わり、その過程で江原鈞の義妹奇二恵津と知り合い結婚するに至る。この大阪を貴司は「第二の故郷」と位置づけている。この時期は、鳴門の一介の文章好きの少年が、当時東京よりも新しいといわれた阪神間モダニズムの急激な洗礼を受けて「物書き」「編集者」として自立していく重要な時期である。

この時期については県立徳島文学書道館紀要第七号にある程度書いたので<sup>1)</sup>これ以上言及しないが、「阪神間モダニズム」というと、多くは建築とか生活様式の文化現象として把握されてきたように思う。『婦人之世紀』はそれが活字・文章として具現された興味有る事例だと思われる。貴司のこのみならず『婦人之世紀』（この雑誌は稀覯本で全巻所蔵は大阪市立大学だけのようである）などは、もう少し研究されてもいいように思う。

## 八・プロレタリア文学運動崩壊期の

### 赤裸々な日録

この時期については、プロレタリア文学最盛期の昭和三年、昭和八年が「非合法との関連」を秘匿するという意図で、書かれていない。しかし、その前後を精査することによって、多くのことを推測することができる。また、昭和九年から十一年、それは小林多喜二が殺され、作家同盟も解散し、日本は国際連盟を脱退してファシズム体制に入っていく困難な時期ではあるが、貴司は雑誌『文学案内』の刊行、東京

地下鉄ストを取材しての長編小説の起稿、小林多喜二全集（ナウカ社版）の刊行などに携わり、抵抗的姿勢を維持しようとする。その間の息苦しい苦闘の様子は日録として書き残されている。しかし昭和十一年の記述は十一月二十三日の

「原稿を送る速達の金もなくなった。このごろは貧乏にすっかり馴れてしまった。」

で尽きており、あと、一年有余の空白がある。貴司はこの翌年すなはち昭和十二年一月三度目の検挙拘禁を受ける。そして、ただひたすら環境劣悪な警察留置所に一年近く放置される。昭和十二年の日記が存在しないのは、そのためである。十二年末、漸く保釈されるが、その時には『文学案内』は廃刊消滅しており、加えてその保釈たるや、一ヶ月毎に保釈継続を検事局に懇願しなければならない性質のものであったようだ。昭和十三年五月までに、日記に記載されているだけでも十回以上検事局に出頭を命ぜられている。あげくが

「……けふも同。夕方までかかって終わる（注・検事の取り調べのこと）。文学案内の仕事が全部共産主義の啓蒙運動ということになった。……（注・自分は）このごろ検挙されてゐる大内とか美濃部、有沢といった教授達や、青野季吉氏のことなどを考へてゐた。あの人は共産党を起さうとするやうな意図をもつてゐた人達ではない。それでも国体変革の企図者として追求されているらしい。自分も文学案内社の仕事で実刑に問はれたとしても、今の日本では仕方のないことだらう。」（貴司日記・昭和十三年（一九三八年）五月四日）

と一度は入獄の覚悟をするまでに追い詰められる。ただ、日記にもこの時期、蔵原惟人の甥で思想取締担当だった市原検事と面談したと、大阪時代からの知友であり今はファシズムの論客となり文部省の高官となっている池崎忠孝（赤木桁平）と会っていることが記載されている。おそらくこれらの取り計らいもあつたと推察されるが、五月二十日起訴猶予を申し渡される。

「……検事局出頭。山根係検事から起訴猶予の言ひ渡しを受ける。年の若いこの検事は恐ろしく自分を敵視してガミガミいふこと一時間あまり……憂鬱な気分で霞ヶ関の通りへ出てくる

と、とてもさはやかな空気なのだ。とにかく、これで去年一年間の仕末がやっとついたわけだ。……」（貴司日記・昭和十三年五月二十日）

一ヶ月後の六月二十一日には、池崎氏に同道してもらって検事局へ挨拶に行っている。そして、この昭和十三年以降戦後まで、貴司の日記（もちろん著作その他からも）「左翼的言辞」は消滅する。「完全転向」が完成したと見ざるを得ない。

この間の状況と心情については戦後（一九四八年）に執筆された小説「愛染」にも率直に書かれている。<sup>12)</sup>

これらのことについては同じく研究紀要『水脈』第八号<sup>13)</sup>に概略を記した。また今回のDVD出版別冊「貴司山治研究」にも多くの文章<sup>14)</sup>が寄せられている。

#### 九．おわりに 戦中戦後の注目点

戦中、戦後に関しても、多くの注目すべき記述がある。紙数の関係で項目だけを略記するに留めるが

・「大東亜共栄圏」末期の内蒙古、華北、東北の実態取材記録（蒙古日記）。

昭和十八年九月～十一月にわたって、内閣情報局の斡旋で文人の現地慰問というような名目を得て、大東亜共栄圏の北辺を旅行した。北京とか張家口などの都会にとどまらず、<sup>バイスマヤ</sup>貝子廟、西ウジウムチン旗など草原の果てまで入り、日本人、現地人の実態を見聞し、詳細な旅行記を書き留めた。

・戦後の小林多喜二全集編纂過程の具体的な記録

貴司は戦後最初の「小林多喜二全集」（新日本文学会版）編纂に昭和二十二年から二十四年にかけて事務局長のような形で関与していたが、疎外され圏外に去る。その間の生々しい実態が記述されている。

・開拓農民運動現場のドキュメント

昭和二十年から二十二年、貴司は丹波山中の開拓地に入植、開拓民となり開拓農民運動にも携わる。当時、食糧難解決の

切り札と期待された「内地開拓」の知られざる実態と農民の運動が詳しく記述されている。

登場人物も多彩で、その多くが、愛憎入り交じった人間的な言葉で言及されている。代表的な人々を列挙すると（順不同）

〔文学関係〕蔵原惟人、窪川鶴次郎、中野重治、宮本顕治、谷口善太郎、平井肇、徳永直、林房雄、難波英夫、藤森成吉、柳瀬正夢、鹿地亘、佃実夫、江口渙、手塚英孝、勝本清一郎、山田清三郎、早坂二郎、榎村浩、丸山義一、など

〔左翼運動関係〕野田律太、牧野弘之、国領五一郎、杉本良吉、永田耀、福永豊功、宮木喜久雄、長尾多喜雄、など

〔徳島関係〕林田繁、蜂須賀年子、武原はん、など

〔蒙古人脈〕須田正継、青山守次、左近允正也、甲斐政治、笹目恒雄、西川一三、福田千之、牧野正民、森田捨三、猪口三蔵、城野宏、岡部理、など

〔大阪時代〕的場多三郎、江原鈞、豊島欽爾、岡田播陽、中井浩水、堀敏一、曾我迺家五郎、など

〔その他〕河田小龍（詳細な取材調査メモ）照葉（京都祇王寺庵主高岡智照）、Sレクラブ（一九五三年頃行われていた左派社会党系の文化人会合）など

これらの時代、モチーフ、人物に言及しようとした時、参照しないでは済まされない多くの記述が含まれている。この膨大な資料の、今後の利用、解析が望まれる。（二〇一一年／三月）

〔注〕

1) 「貴司山治全日記……一九一九年～一九七一年」DVD四枚、人名 検索機能付き。

五十二年間の全日記、昭和八年の東京地下鉄争議の詳細な取材ノート、昭和十八年の内蒙古・華北旅行の八万字に及ぶ「蒙古日記」、の画像データを収載し、かつ二万五千件に及ぶ詳細な人名索引によつ

て、画面検索が可能になっている。

別冊「貴司山治研究」A5版四八〇頁、上製本

解説六篇、解題八篇、作品紹介、資料編（昭和九年～昭和十三年の日記翻刻、小説「地下鉄」全文伏せ字起しテキスト、略年譜、著作目録など）

立命館大学貴司山治研究会（中川成美教授）編、不二出版株式会社、二〇一一年一月刊。なお上記の各DVD、別冊は分売可能となっている

2) 「昭和九年三月二十六日の日記」原文は前記DVDに収録されている。また翻刻文が別冊「貴司山治研究」一七五頁に掲載されている。

3) 「私の文学史」貴司山治（伊藤純編）第三章第二節  
貴司山治インターネット資料館（左記）に全文掲載  
<http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito>

4) 「鳴門の塩田争議」中野正司『鳴門路 鳴門郷土史研究会報』第三号（平成元年十二月一日鳴門郷土史研究会発行） 六五頁

5) 前掲書 七一頁

6) 「貴司より鳴門・岩村武勇氏あて手紙のコピー」昭和四十二年八月 二十六日付け（徳島県立文学書道館所蔵）

7) 「鳴門の塩田争議」中野正司『鳴門路 鳴門郷土史研究会報』第三号（平成元年十二月一日鳴門郷土史研究会発行） 八九頁

8) 前掲書 八九頁

9) 前掲書 九十頁

10) 「私の文学史」第三章第二節 <http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito>

11) 「貴司山治」はなせ「きし・やまご」か 伊藤純 徳島県立文学 書道館研究紀要『水脈』第七号、平成二〇〇三年三月三一日発行、一〇 七頁

12) 「愛染」初出は『月刊読売』一九四八年三・四月号。但しこの初出 は一種の情痴小説としてかかれているが、掲載後大幅な改変が加えられた原稿が残されている。この改稿は単なる情痴小説の域を出て、戦時体制の中で追い詰められ崩壊していく一個の人間像を描くことが意図されている。この改変版「愛染」は伊藤純編『小説集・丹波 アリラン』（二〇〇六年十一月刊）に掲載してある。以下、その関 連部分を示す。

「……その年の秋、伊達は「リアル」のために、又しても警視庁の特高にとらえられ、東京市内の方々の警察署の留置場におよそ一年間拘留されたあげく、むろん「リアル」はあとかたもなくつぶされてしまい、やっと身柄だけを「釈放」されて出てくると、今度は警察から廻った調書を材料に、三日にあげず検事局によびつけられて、「リアル」の仕事がコミンテルンの決議した人民戦線運動の一翼であった、という「認識」を書け、と責めつけられた。そんなことを書けば、治安維持法にひっかけられて、五年でも十年でも刑務所に送られるのがわかりきっているので、伊達はそうして社会から抹殺しようとする

検事と根気よく抗争しながら、板子一枚下は地獄の波にただよっているような時がつづき、その間、伊達からみれば学生にすぎない年配の若いその検事の男から文筆の仕事は一切差し止められて、貧乏のどん底におち入ってしまった。そういう月日となったのである。

……伊達は、検事局からの帰りに、マロニエの並木路を虎ノ門のほうへ重たい足を引きずって、文部省にいる昔の友人を訪ねて行った。その友人は、夏目漱石の旧門下生で、いまは文学をすてて政治に走り、文部参与官になって世間からはファシズムの花形のようにいわれたいが、やってきた伊達を見ると、

「まあ、十年潜伏して根気よくやりたまえ。そのうちに君らの時代がくるよ。」

と、はげますようなことをいって伊達と検事との和解（実は降伏）を引き受けてくれた。伊達は、友人の口上を、単なる「政治家」的なお愛想とも思わなかったが、それに呼応するようになつた気持ちには、もつなかつた。思想の変化というよりも、肉体が変化した感じであった。

（注・「伊達」は貴司自身、「文部参与官」の友人は池崎忠孝（赤木桁平）、『リアル』は『文学案内』に相応する。……は中略部分）

13) 「貴司山治日記」（大正八年～昭和四六年）について 複写データ化の完了と今後の公開を目指して「伊藤純 徳島県立文学書道館 研究紀要『水脈』第八号、平成二十二年三月三十一日発行、一～七頁

14) 「貴司山治全日記DVD版別冊『貴司山治研究』」不二出版株式会社、二〇一二年一月刊

「文学者・貴司山治とプロレタリア文学」中川成美 九～二二頁

「日記に見る貴司山治の転向」浦西和彦 三六～四六頁

「作家生活の始まりと同伴者時代」和田崇 九六～一〇八頁

「弾圧の中で・日記の空白とプロレタリア文化運動の時代」

池田啓吾 一〇九～一一八頁

「転向の時代」鳥木圭太 一一九～一二九頁